

日本史サマーセミナー

県立柏陽高校 矢野 慎一

1. はじめに

毎年夏休みの最終週に、神奈川県高等学校教科研究会社会科部会の歴史分科会主催で行われる日本史サマーセミナーが、今年も8月18日(木)と19日(金)の二日間の日程で開催されました。会場は神奈川県立柏陽高等学校で、私が柏陽高校に赴任した2007年以来、ほぼ毎年開かれています。この企画の目的は、高校教員の日本史受験指導の指導力向上と同時に、歴史研究者による講義から最先端の研究成果を学ぶことにあります。そのため、毎年一流の研究者に講義していただいています。今年も4名の大学教員をお招きして、高校生とともに多くの高校教員が学びました。

2. 今年の講義

18日は、はじめに日本女子大学の成田龍一先生から「ゴジラの社会史」と題する講義がありました。映画「ゴジラ」シリーズを題材にして、映画には映画が製作された時代状況が反映されるということ話をされました。また、「ゴジラ」には戦争の記憶が色濃く映し出されており、ビキニ環礁の水爆実験はもちろんのこと、東京大空襲やベトナム戦争の北爆なども読みとることができると指摘されました。

つぎに獨協大学の丸浜昭先生が、日中戦争期、とくに1941年から42年にかけての中国北部で、日本軍によって大規模に行われた「治安戦(燼滅作戦・三光作戦)」の実態について講義されました。近年の歴史修正主義という動きの中で、南京大虐殺はなかったという言説が流布されていますが、笠原十九司の研究の紹介などから、南京を上回る莫大な被害を中国に与えていたことがわかりました。

19日は、信州大学の大串潤児先生より「戦争責任って何だ」と題する講義からはじまりました。雑誌に掲載された風刺漫画「こいつが悪かったんだ!」を示し、そこから戦争責任の問題を考えてみようという内容でした。そして伊丹万作のエッセイ「戦争責任者の問題」を引用することで、多くの日本人がだまされていたと主張し、結局だれも責任をとらなかった敗戦後の日本社会のあり方を論じました。伊丹の「「だまされていた」といって平気でいられる国民なら、おそらく今後も何度でもだまされるだろう。」という言葉の意味を重く受け止めさせられました。

最後が同志社大学の奥野浩之先生からの「日本国憲法」についての講義です。近年、声高に叫ばれている「日本国憲法押しつけ論」に対し、GHQの憲法草案作成作業に関与したベアテ・シロタを紹介して、彼女の担当した人権条項が、戦前の日本で暮らした経験をもとに書かれたもので、現在においても色あせない普遍的な内容であったことが指摘されました。

両日ともに講義終了後、講師の先生方を囲んで教員の研究会が行われ、熱心な質疑と意見交換が行われました。

3. 今後の課題

ここ数年同じような問題に悩まされていますが、それは生徒の参加が思うように増えないことです。内容については万全の自信をもっていますが、日程や講義の配置などの工夫によってより多くの高校生が参加できるようにしたいと考えています。

なお最後になりますが、本セミナーは神奈川歴史教育研究会の協賛を仰ぎ実施しております。